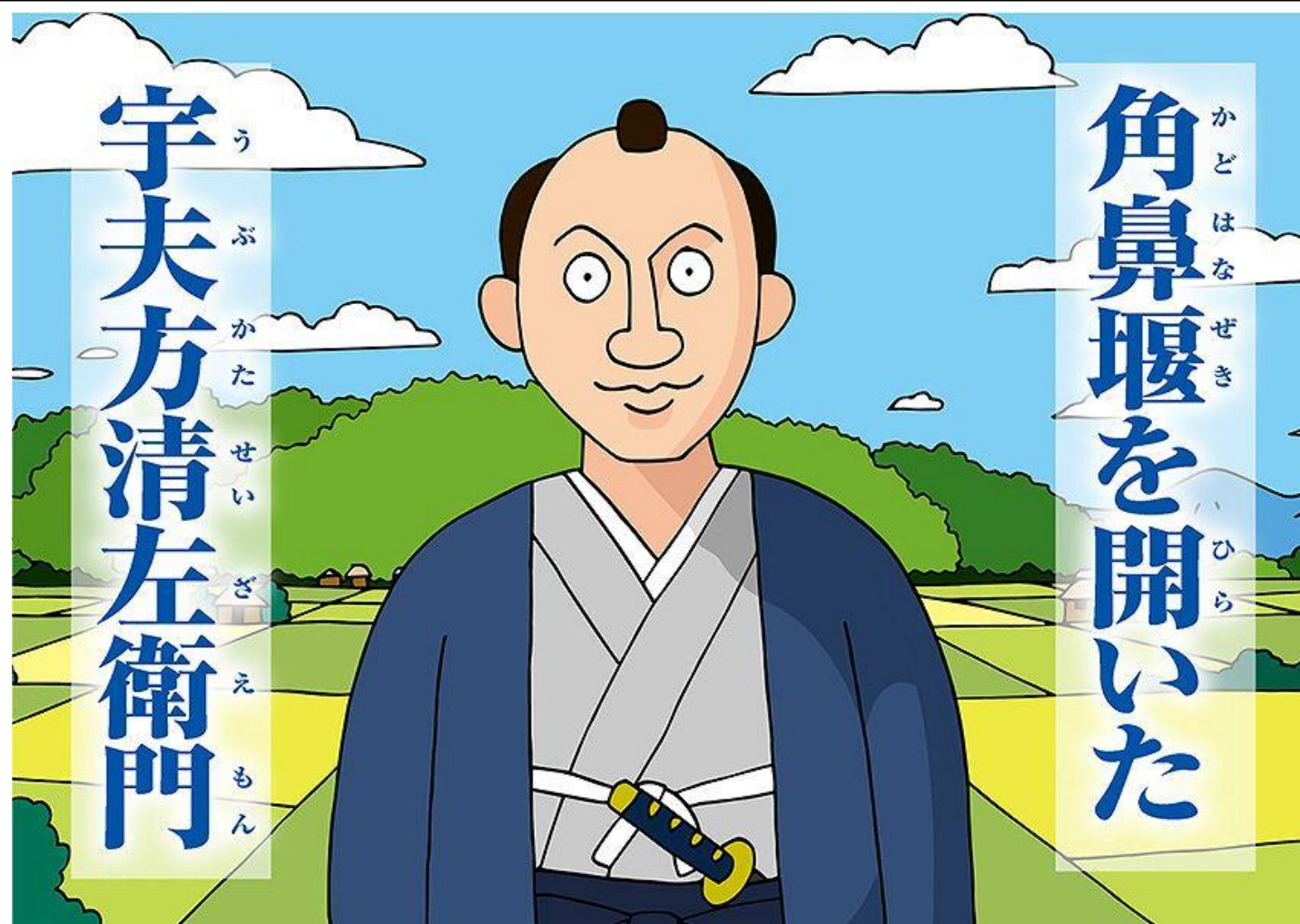


# 角鼻堰を開いた宇夫方清左衛門



(ナレーション)

むかし、むかし、江戸という時代、遠野の綾織地区を治めていた「宇夫方清左衛門」というお代官様がおりました。

彼には、大きななやみがありました。

# 角鼻堰を開いた宇夫方清左衛門



## (ナレーション)

その頃の綾織地区は、平らな土地はあるのですが、土地の高いところと低いところの差が大きかったり、葎が生えている湿った土地が多かったり、農業のできる土地が少なかったのです。

そのため、収穫できるお米も少なく、村人たちの生活は、貧しくきびしいものでした。

## (清左衛門)

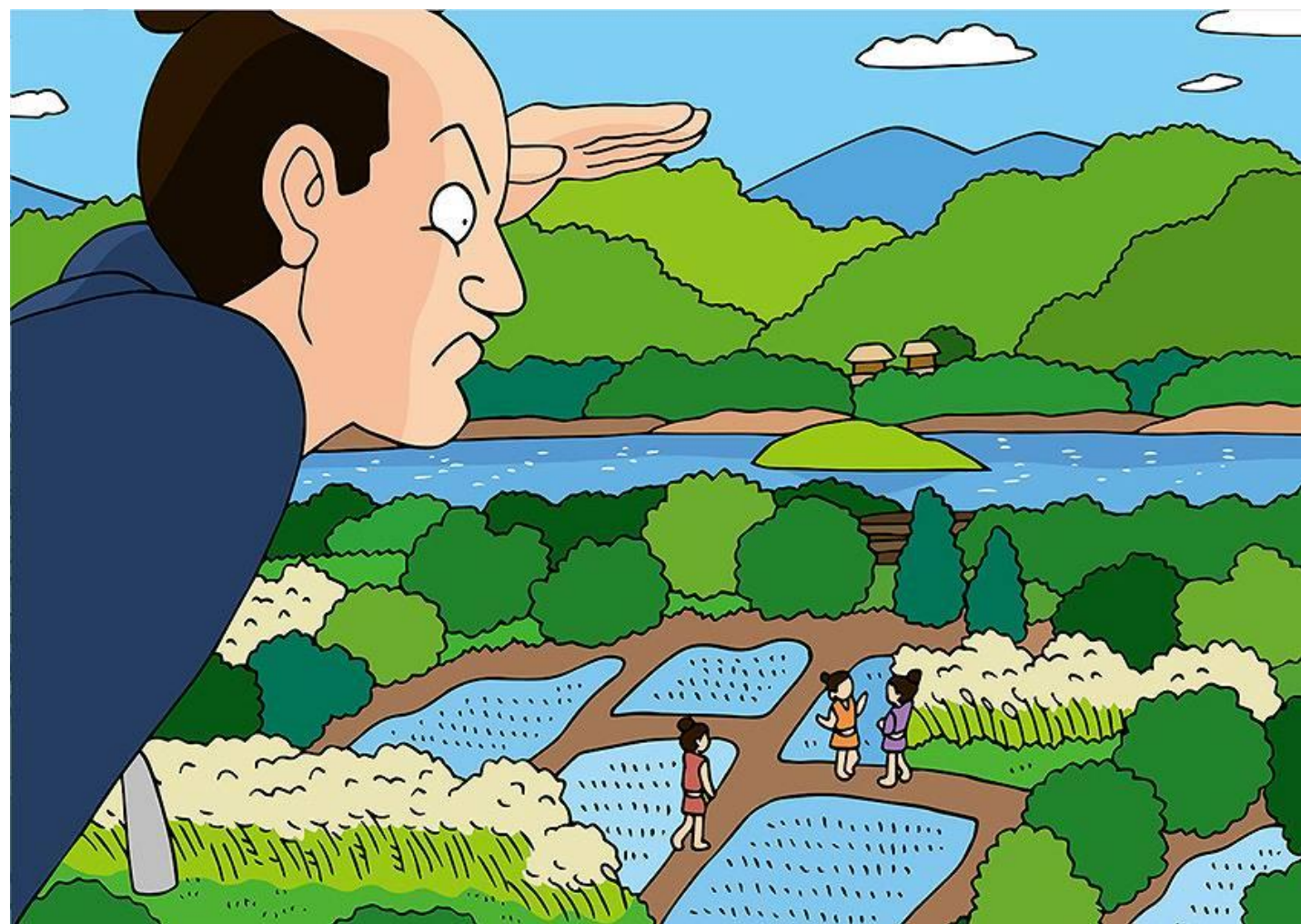
「この小さな田んぼでは、とれる米も少ない・・・」

もっと田んぼを大きくできないものだろうか・・・」

## (ナレーション)

清左衛門は考え続けていました。

# 角鼻堰を開いた宇夫方清左衛門



(清左衛門)

「ムム！ そうだ！」

(ナレーション)

綾織地区には、猿ヶ石川という水の量が豊かな川がありました。

(清左衛門)

「あの川から水を引いて、この地域へ行きわたらせることができれば、田んぼをたくさん作ることができて、村人の暮らしが豊かになるぞ！」

(ナレーション)

と、清左衛門は思いつき、

(清左衛門)

「これこそ、私がやらなければならない仕事だ！」

(ナレーション)

と、強く思ったのでした。

## 角鼻堰を開いた宇夫方清左衛門



(ナレーション)

しかし、川は低い土地を流れているため、綾織地区に水を引くのは、むずかしかったのです。

清左衛門は、毎日毎日村を調べて歩き、毎晩おそくまで考え、なやみ続けておりました。

(清左衛門)

「やはり、これしかない！  
角鼻付近に、水の取り入れ口をつくろう！  
なやんでいても、村人の暮らしは良くならない！」

(ナレーション)

そう決心したのでした。

# 角鼻堰を開いた宇夫方清左衛門



(ナレーション)

角鼻とは、猿ヶ石川の上流にある高い丘でした。

川は、そこをまわりこんで流れているため、トンネルをほって村に水を流す計画を考えたのです。

(家来)

「清左衛門様、こんながけを工事するのは無理です！」

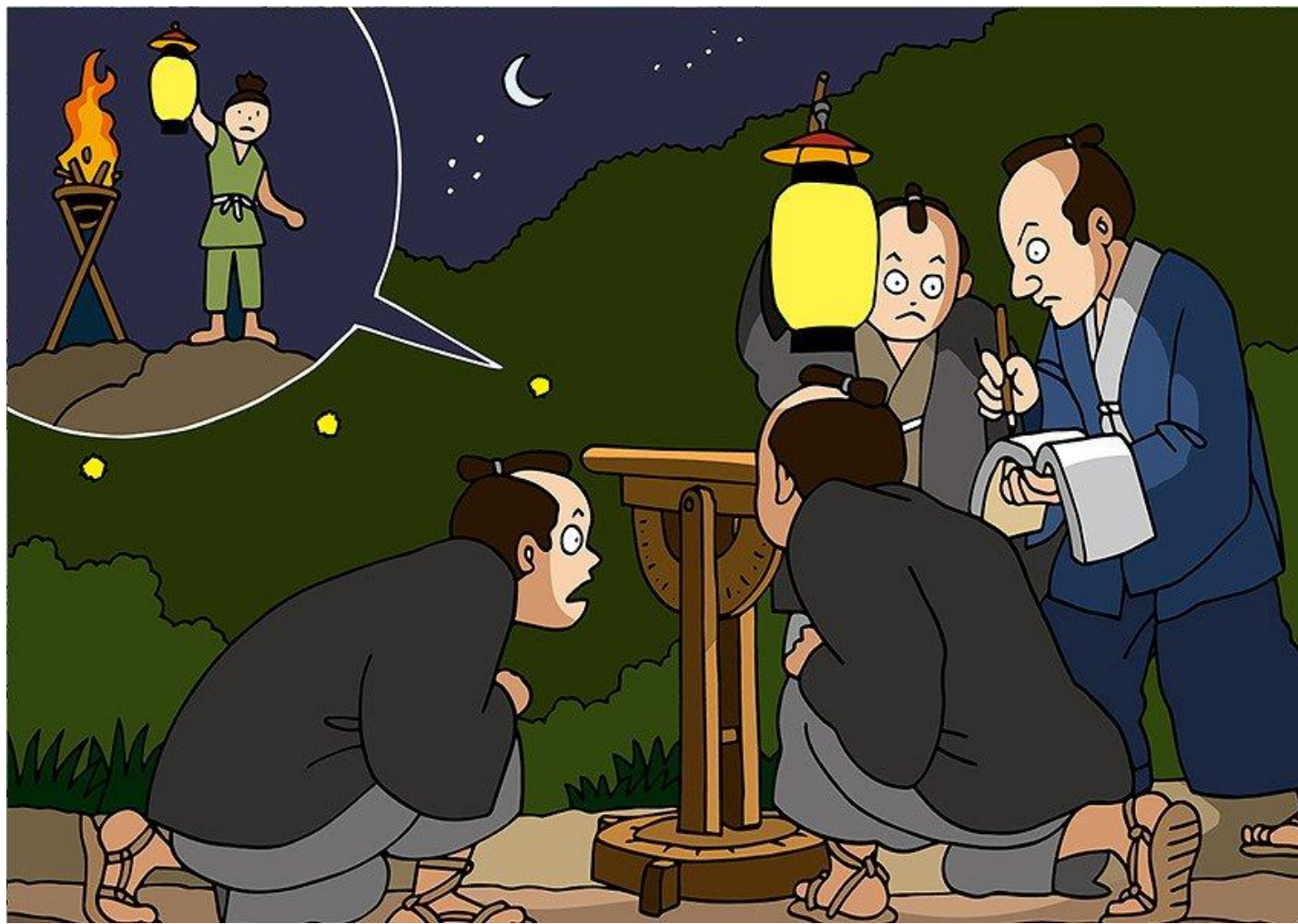
(ナレーション)

家来が言いました。

(清左衛門)

「むずかしいことはわかっている。しかし、これが一番良い方法だ！村のために、どうしたらできるかを考えようではないか！」

## 角鼻堰を開いた宇夫方清左衛門



### (ナレーション)

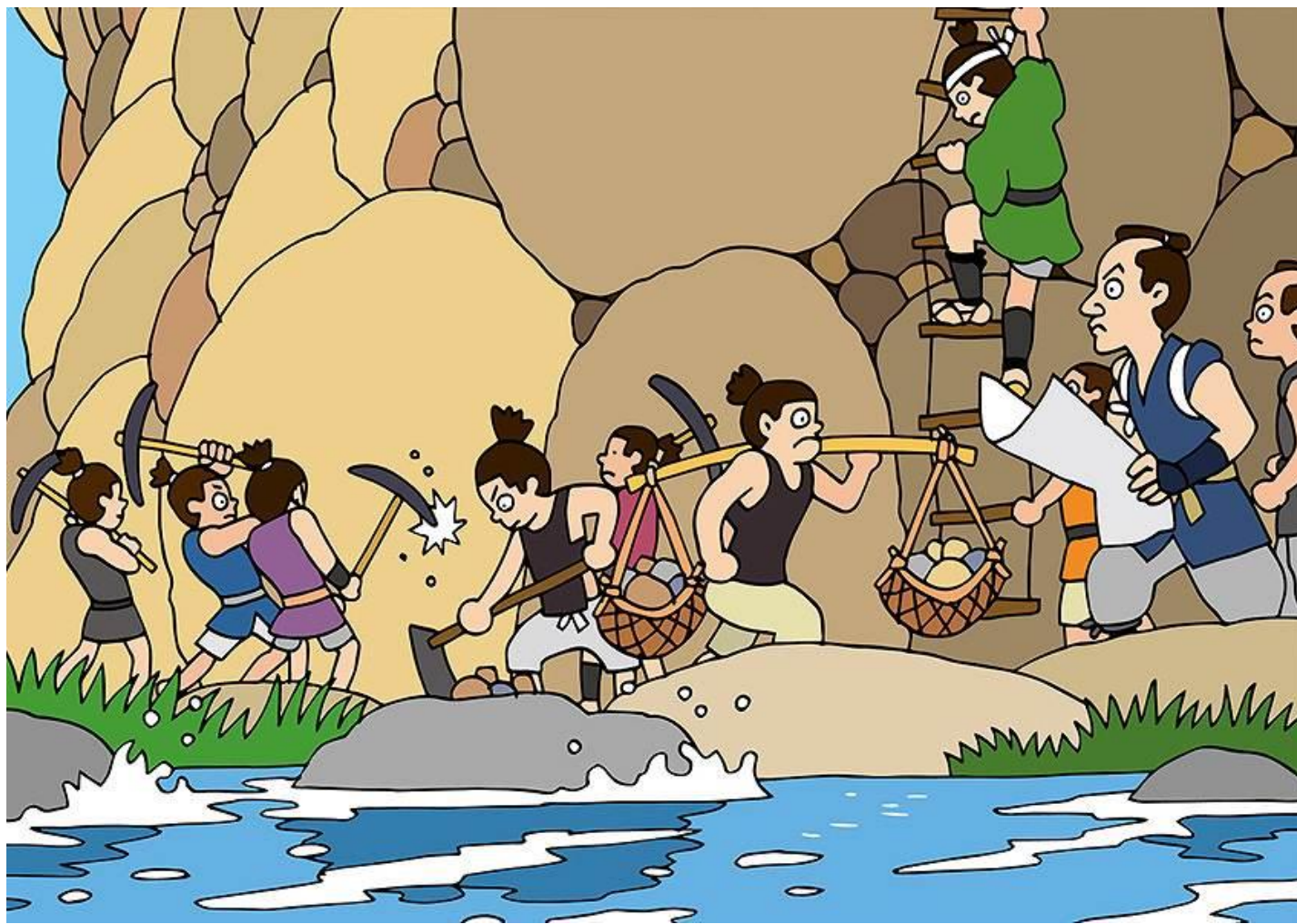
清左衛門と家来は、村中の土地の高さを測り、水をどうやって流すかを考えました。

工事に必要な測量は、昼だけでなく夜も行われました。

角鼻と寒風と西風館の三箇所にかがり火をたいたり、村人たちに提灯をもたせて、その光の位置を測ったりしました。

こうして、やっと計画ができあがり、清左衛門は、村人たちを集めて計画を説明しました。

# 角鼻堰を開いた宇夫方清左衛門



(ナレーション)

いよいよ、工事のスタートです。

しかし、角鼻のがけは、想像以上のせまさと、岩のかたさで、思ったように工事が進みません。

(村人A)

「お代官様、本当に、ここにトンネルができるんでしょうか？」

(清左衛門)

「確かにむずかしい工事ではあるが、あきらめずに強い気持ちをもってやりとげよう！

完成すれば、田んぼがたくさん作れるようになるのだから！」

(ナレーション)

清左衛門は、働く人たちを元気づけ、何日も工事を続けました。

それでも、なかなか進まない工事に、しだいに、村人たちは不安になりました。

# 角鼻堰を開いた宇夫方清左衛門



(村人A)

「こんな計画、無理にきまつてるべえ！」

(村人B)

「まったくだ！  
ただでさえ生活がきびしいのに、  
毎日働かされて、たまったもんじゃ  
ねえ！」

(村人C)

「だいたい、穴ほって、大雨でもき  
てみろ！  
村が、水びたしになるかもしれ  
ねえぞ！  
代官は、いったい何を考えてん  
だあ！」

(ナレーション)

村人たちは、口々に文句を言い、  
工事に来なくなったのです。

それを知った清左衛門は、



# 角鼻堰を開いた宇夫方清左衛門



(清左衛門)

「みんな、聞いてくれ！  
この工事は、むずかしくて、たくさん  
の人手や費用がかかる。  
しかし、決して自分が得するために  
やっているのではない！  
田んぼや畑が増えて収穫が多くなり、  
村の生活が良くなることこそが  
目的だ！  
どうか信じて協力してほしい！」

(ナレーション)

そう話して、村中を歩いて説得したのです。

それでも、参加しない村人もいました。

(清左衛門)

「だが、ここで、あきらめるわけには  
いかない！  
何としても続けるぞ！」

(ナレーション)

清左衛門は、強く思いました。

## 角鼻堰を開いた宇夫方清左衛門



(ナレーション)

そして、清左衛門は、先頭になって働きながら、一部の村人と、何日も、何日も、つらくてきびしい作業を続けるのでした。

すると、村人たちは、

(村人A)

「代官様が、あんなに村のためにがんばっているのに、おれたちは、何をやっているんだあ・・・」

(村人B)

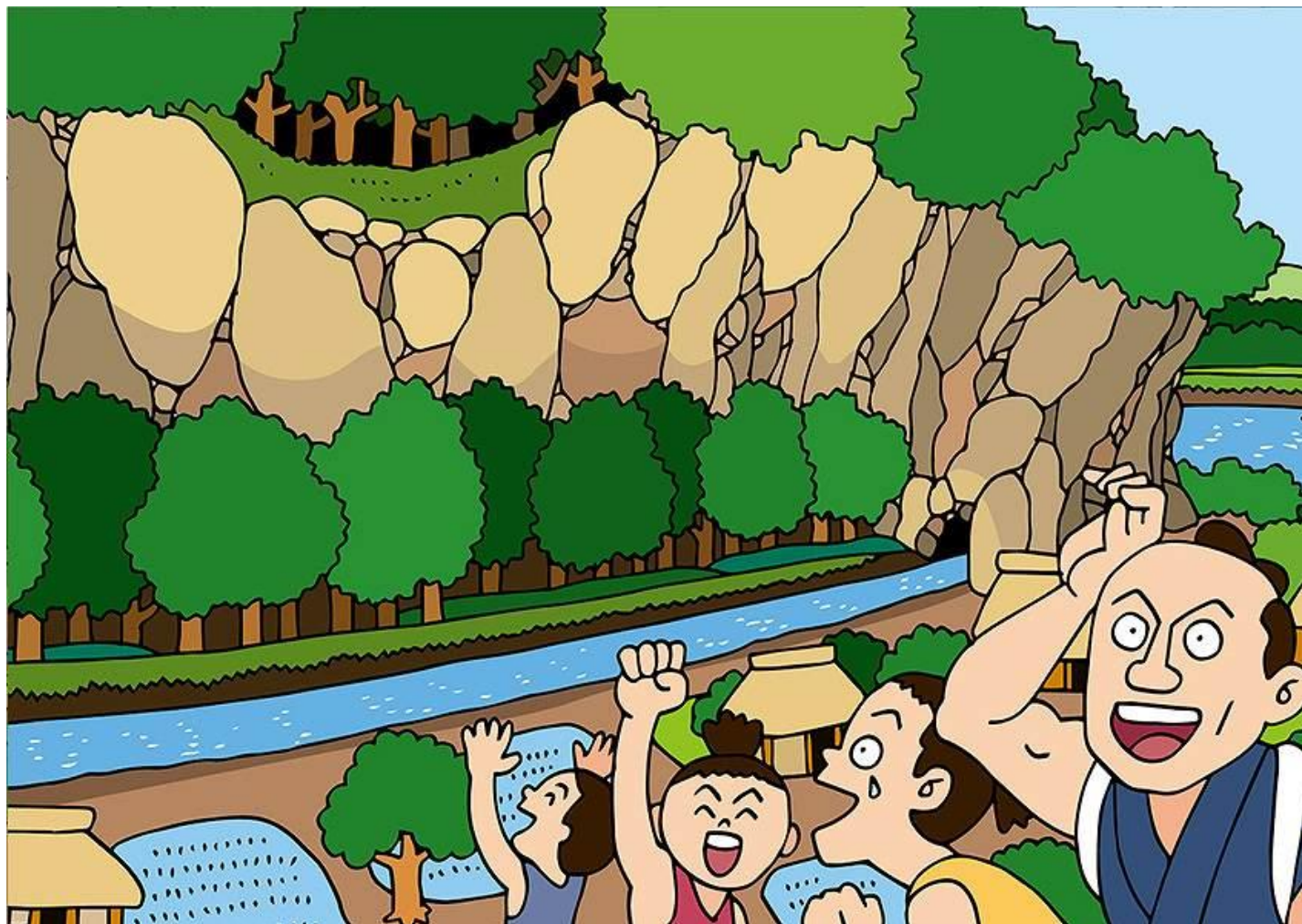
「やっぱり、おれも、代官様を信じて働いてみる！」

(ナレーション)

村人たちは、気持ちを入れ替え、次々と工事に参加しはじめました。

もう、文句を言う人はいません。

# 角鼻堰を開いた宇夫方清左衛門



(ナレーション)

そして、ついにトンネルと用水路は完成しました。

清左衛門が、工事を思いついてから、実に21年の歳月がたっていました。

そして、その後も水田開発が進められ、約80ヘクタールもの広い田んぼや畑が開かれました。

(村人A)

「代官様、ありがとうございます。これで、村も生まれ変わりました！」

(清左衛門)

「いやいや、これは、皆の力で完成できた工事だ！」

「こちらこそ、礼を言わせてくれ、本当にありがとう！」

# 角鼻堰を開いた宇夫方清左衛門



## (ナレーション)

この工事は、近くの村からも注目され、殿様からも、おほめの言葉をいただくほどの大変立派な仕事となりました。

そして、四百年近くたった今でも、この「角鼻堰」は、遠野市内の代表的な穀倉地帯である綾織地区の約二百ヘクタールの田んぼや畑をうるおしています。

おしまい